

幕張も 歩いて見れば おもしろい  
幕張の寺社巡り

4月22日(金)、津田沼の病院への定期通院の日。4月なのに気温 24 度の初夏のような日でこのまま家に帰るのは勿体ないので、京成千葉線の電車に乗った。京成幕張駅に降り立ったのは 15 時頃だったか。駅の隣には青木昆陽の記念碑があり、駅前には、秋葉神社と昆陽神社の厳めしい祠が待ちかまえていた。

◆青木昆陽と秋葉神社

青木昆陽は、江戸時代の蘭学者。日本橋小田原町の魚屋の息子として生まれ、京都で儒学を学んだ。のちに大岡越前守に取り立てられ、大飢饉の折の救荒作物として甘藷が有効であることを八代将軍吉宗に提言し、小石川薬草園ほか各所で甘藷栽培を手がけた。その結果幕張(当時は馬加村)で初めて成功した。その後各地にこれを広めて、飢餓から救う食料としての効果を上げた。青木昆陽の没後、天明の大飢饉が起きたが、この地では甘藷が人を救い、犠牲者を出さずに済んだ。昆陽は「芋神さま」と崇められ、1846年(弘化3年)に秋葉神社の境内に昆陽神社として祀られた。秋葉神社は建立時期・場所は不明。元は権現様として崇められていたが、信仰の厚い氏子から土地の提供を受けて享保年間にこの地に移された。



県道美浜長作線を総武線・京成千葉線と立体交差させるためにこの地に地下道が掘られ、工事期間中は一時子守神社(後述)境内に仮住まいした。工事が完了して戻ってきたが、コンクリートのトンネルの上に乗るといふ珍しい形で神社が復活することになった。それよりも何よりも、あの風前の灯のように哀れだった昆陽神社が立派になり過ぎてびっくりした。

一般的には秋葉神社は火の神で、火災から守ることを願いとして祀ることが多い。

◆補陀落山寶幢寺(ほうどうじ)

京成千葉線の線路に沿って幕張本郷方面へ歩いて行く。途中道路工事の関係で地図通りに歩けない場所があり、地図と磁石に頼ることになったが、再び線路沿いの道に戻ると立派な塀が現われた。真言宗豊山派の補陀落山寶幢寺(ほうどうじ)。目の前を電車が走り、大きな跨線橋が斜めに空に向いている。



大同元年(806年)に宥患上人により創建されたが詳細は不明らしい。当初はこの地(馬加村・・・まくわりむら)には七つの寺があったが、明治7年に五つの寺をあわせて寶幢寺となった。本堂が建つ敷地の何倍もある墓地が道の向こうに広がっていた。墓石を見るとけっこう古いものが多いように感じた。



◆子守神社(こまもりじんじゃ)と巖島神社

この辺りは集落の中に細い小道(路地)が走っており、所々に路地の名残と思われる空き地があったり路地の途中に井戸があったりで、面白い。地図と磁石を見ながら路地をくねくねと曲がり、次の目標に向かった。

傘をさしたらすれ違うのが難しいような路地を抜けると、頭上から豪華な社殿に見おろされるようになった。塀沿いに正面に回って鳥居を潜ると、子守神社と書いた提灯を左右に配した威風堂々の社殿が横綱土俵入りのように構えていた。

創建時期は不詳とされている。建久4年(1193年)、千葉常胤の四男大須賀胤信が富士の狩り場へ出向く

前にこの社に祈願したら、良い成果を上げた。お礼の気持ちから馬加城近くに新しく社殿を建てて、弟の中須賀正胤を神職に据えた。その昔「素加天王社」と呼ばれていたのはこのためと思われる。永昌5年(1508年)氏子の移住により再び遷座し現在の地に建った。いつから子守神社となったのか、何故子守神社という名前になったのか、帰宅後に調べてみたがわからなかった。

境内末社として巖島神社、天神社、稻荷神社などがある。海を目の前にした村なので、巖島神社の存在は頷けるが、海の方を向いて建っていないのが気になった。巖島神社の前に漁船の錨が二本飾ってあり、横の看板に「この錨は幕張の海を埋め立てる前使用されていた物です」と書いてあった。



#### ◆浅間大神と大宮神社

子守神社を出て、神社前の路地を北西に進むと、正面に鬱蒼と茂った緑の小山が見えたので行って見ることにした。近づいてみるとこの小山は想像以上の大きさだった。

正面に向かうと左手に小さな鳥居が建ち、急斜面を登る細い道が切り込まれている。鳥居の足元に建つ石板の中央に刻まれている文字は、「小御嶽磐長姫神」、左端に「富士講中」と読み取ることが出来た。

恐る恐る鳥居を潜って見ると、僅か数メートルで行き止まりになり、山を背負って石碑が建っていた。裏面へ回れなかったので建てた年月などは確認出来なかったが、全面の刻字を読み取ることができた。

右側の文字は「第一?横宿(?:判読できない文字)」、二行目に「教会講社」、そして中央に大きな文字で「浅間大神鎮座」とあり、大きな文字の上には富士講の石碑にしばしば刻まれている波状の線で描いた富士の山型と「水」という文字。石碑の文字面は南東を向いており、富士山の方角でもないし稲毛浅間神社の方角でもない。

いずれの石碑も建てられた年月が確認出来ないなので、ここから獲られる情報には限りがある。

「教会講社」は、出雲大社を頂点とする大国主命を祭神とする「出雲大社教(いずもおおやしろうきょう)」や、天理教などで使われる言葉で、木花咲耶姫を祭神とする浅間信仰・富士講でも使われていたのか、細かいことはわからない。

横宿は子守神社の門前にあった地名のようで、まさに地元の人々の信仰活動の名残なのかもしれない。

横宿・中宿・上宿・下宿という地名(字地名)は街道沿いの宿場町ならばどこにでもあり、隣の検見川村にもあったが、ここは地元「幕張(馬加)の横宿」と解釈するのが妥当だろう。

右手にこれまた急傾斜で登る細い石段が切り込んであるが、「これより先立入禁止 大宮神社」と書いた白い看板が建っている。山の後ろ側には民家が並んでおり、危険とも思えないので、注意深く石段を上ってみた。

20~30段あったらだろうか、登り切ると台地状の広がりが見われ、その先に小さな石の祠が建っていた。祠には何の表示もないので、入口の看板が示す「大宮神社」が正式名称に違いない。広い台地状の山頂には小さな突起がいくつかあり、ことによると未発掘の塚があるのか、それともこの山全体が古墳のようなものになっているのかもしれない。大宮神社の祠は海の方を向いて建っているようだった。

大宮神社という名前の神社は全国に存在するが、「大きい宮」と敬称として付けた物が多いらしく特定の神を祀る神社の群ではないらしい。前述の浅間大神とつながる一つの山として見るのが正しいのかもしれない。

国土地理院の地形図によればこの山の頂上は海拔約16m。東側山麓を流れる川は屋敷・実糸の谷から流れてくる浜田川。川の岸边(海拔3~4m)にこんもりと膨らむ16mの山は、海岸に立ち、海を見下ろす小山だった。



## ◆首塚と荒馬の墓

浅間大神と大宮神社の南西に、もうひとつ鬱蒼と茂った小山がある。地図を見ると道祖神社と表記があるので行って見ることにした。山を一廻り回ってみたら入口が何力所かあることがわかった。

西側から入って見たら、文化財の説明看板が建っており、この山の名前が「大須賀山」であることがわかった。その昔、このあたりは千葉郡大須賀荘須賀原と呼ばれており、大須賀氏(子守神社の項参照)が治めていたが、江戸時代には馬加村となった。大須賀山は古代には海に突き出した小山になっていて、山の中腹に大日堂があったことから堂山(堂の山)とも言われていた。

西側から入山して石段を上がると、いきなり「荒馬紋蔵の墓」が現われた。文化・文政年間に活躍した地元出身の相撲取りで、最高位は関脇。引退後は四代目宮城野馬五郎を襲名した。

墓の周辺にはいくつかの小さな祠が置かれているが、一番大きいトタン板で囲われた祠が気になったので帰宅後に調べてみたら「風邪引き地蔵」ということがわかった。「風邪をひいたときに拝むと直る」と言われて人々の役に立っているとのことだった。

荒馬の墓の先に「首塚はこちら」と、壊れかけた看板が建っていたので行ってみたら、広く平坦な大須賀山の頂上に飛び出した。大宮神社(前述)と同じように、いくつかの塚らしい突起がある平坦な山頂に飛び出した。

首塚は山頂の一番奥に建っていた。足利幕府の内紛が千葉氏にも飛び火して、千葉胤直と叔父である馬加康胤との骨肉の戦いにまで発展。1456年(享徳5年)、康胤は胤直を焼き討ちにして勝利を収め千葉氏を名乗ったが、足利義政の命を受けた東常縁の軍に襲われて馬加城から逃亡し、市原の八幡で自刃。遺体は八幡の地に葬られたが、家臣が首だけ持ち帰り、馬加の大須賀山に葬った。

首塚は高さ 3mほどの五輪の塔で威風を放っている。寛永年間に建てられたもので「建之 朝雅 宥光二親 宥得」と刻まれている。この名前が何者なのかは不明らしいが、大同元年(806年)に寶幢寺を創建した僧の名が宥恵上人なので、同じ文字を持つ名前であることから考えると、この寺の流れの僧が祖先を供養するために五輪の塔を建てたのかもしれない。(寶幢寺の項参照)

平坦な頂上の一隅にあった小さな石の祠をのぞき込んだら、「小山泉稻荷神社」と刻まれていた。



## ◆道祖神社

東側の山道を下ってみたら、途中に「小さな祠がいくつも並ぶ平坦地」があった。ひとつひとつの祠には何も名がついていないので正式名称は分らないが、これが大日堂の跡と思われる。片隅に建つやや小さめの石碑に刻まれた「道祖神」という文字は、大正7年となっていた。現在の地図に記載している「道祖神社」は、これに違いない。旧千葉街道(房総往還)から至近距離にある場所なので道祖神の必然性も充分理解できる。



下山して改めて山の形を確かめると、浅間大神・大宮神社があった小山も大須賀山とひとつながりの山だったようである。京葉道路と鉄道の線路が景観を替えてしまったが、地形図で確認してみると花咲・屋敷の方からせり出した尾根の末端だったような気がする。

習志野市の屋敷という所は、馬加(千葉氏)康胤の居城があったことも考え合わせると、様々なことが頭の中で結びつき、何かを語ってくれているような気がしてきた。

検見川のように海辺に迫る海岸段丘はなく、花見川の河口に広がる沖積平野と、穏やかな傾斜で平地に落ちる低山の山ひだ、海を前にした集落の風景には「柔らかさ」が感じられた。とは言っても、この地が長い歴史の中で体験してきた様々な異変を考えると、「幕張も意外に奥深い所だな」というのが率直な印象である。

以上

